

涙が止まらなかった

—映画「嗚呼 満蒙開拓団」を見て—

畠山 孝

私は今、1926年生れの85歳です。戸数17戸ある農漁村で育ち、畑を耕し、漁草や魚を食べて暮らし、夜は電灯もなく、ラジオも聞けずの田舎育ちをしてきました。その頃、中国と戦争をしており、村からも何人かの若者が軍人として出征し、戦死者も町全体で何人かが出たと聞いておりました。

私は大きな町の小学校のある分校で、先生一人生徒三十人ほどが学ぶ学校に入り、更に私一人が上級の昔の中等学校に進んで今の宮古市で学び、ラジオや映画を見ることができました。その頃、上海や南京が陥落し、夜、旗行列で出た記憶があります。

その頃、中国戦線から帰った軍人から、中国で暴れ、多くの人を殺した話を聞き、眉をひそめたことを知っています。私は子供心にも、前には日清戦争をし、今また中国と戦って、台湾や満洲を取るということは、卑劣なことで絶対に許されないことだ当時考えておりました。

戦争どころでない。中国は日本の本家のような国だ、仏教や漢字を日本に伝えて下さって、日本は栄えてきたではありませんかと・・・そうしているうちに「嗚呼 満蒙開拓団」の元となる青少年義勇軍の募集のポスターが校舎に貼られているのを見ました。友人の何人かは志願して内原訓練所に入団して帰ったのですが、正式に入団した話は聞きませんでした。私は、その入団者がどんな仕事をしたかはよくわかりませんが、豆や芋を満洲の大地に植えて生活し、やがて満洲を占領して日本人村をつくる目的であろうと思ったのでした。

昨日、兄が暫くぶりで来たので、兵隊で満洲に2年ほど居たので、開拓団の様子を聞きましたら、多くの日本人が農地を求めて厳しい自然の中で活動していた話を聞きました。そんな中で、中国人は親切で、やさしい方が多かったとの話も聞きました。

やがて日米戦争が始まり、はじめは勝っていたが次々と敗れ、やがて特攻隊という人間弾を使い敗れたのでした。

さて映画に戻りますが、私は終わりまで涙しました。日本軍の犠牲になった人々が終戦時、日本に帰るため、ハルピンを目指して山野を、子供の手を引いてさまよい、行って見たら、日本軍は全部帰って不在、人々はそのまま寒気と食べ物もなく、ソ連軍に追い殺され5千人もの人々がそこで死亡され、中国人が多数協力してその遺骨を拾い集めて、立派な日本人墓碑を建立して下さった。しかも軍と民衆を区別して周恩来首相の判断で実現されたと紹介され、私は涙が止まりませんでした。

中国人は皆、日本を親の敵^{かたき}以上に考えられて当然の時、このように手厚い好意をいただいた日本人として、何とお礼を申し上げてよいか、私はこのことを多くの人々に伝え、人

道の最高のしぐさを広く日本人に伝える責任を感じております。有難うございました。

尚、周恩来首相は、日本の田中首相との会見で、立派な戦勝国でありながら、日本から賠償金を取らないことも声明され、破れた日本を救う処置をとられ。重ね重ね感謝申し上げます。やがて中国は、世界のリーダーとして人類の先頭に立たれることを祈念して筆を止めます。

(はたけやま・たかし：1926 生まれ。小学校教員を 30 年、県政府モニター、民生委員、シルバー人材センター広報編集部長などを歴任。桂林、香港、上海をはじめ各国を視察。今回は、宮古市での自主映画会で、映画「嗚呼 満蒙開拓団」を見る)